FOA-NEWS 通算第３５号
2014/12/30

「アウェー」でのレフリー経験を振り返る

第３回 U19 世界選手権クウェート大会 参加報告

文・写真＝阿部　仁

大会日程および概要

7/4　深夜	東京出発
7/5　午後	クウェート到着
7/6 夜	審判クルーの全体 Meeting
7/7 深夜	予選ラウンド　第１試合　(2 会場、4 試合)
7/10　深夜	予選ラウンド　第２試合　(2 会場、4 試合)
7/13 深夜	予選ラウンド　第３試合　(2 会場、4 試合)
7/15 深夜	7 位・5 位決定戦　　(1 会場、2 試合)
7/16 深夜	3 位・1 位決定戦　　(1 会場、2 試合)
7/17-18	クウェート出発
7/18	帰国

予選ラウンドではＡ組のカナダ、オーストリア、フランス、クウェート（ホスト国）と、Ｂ組のアメリカ、日本、メキシコ、ドイツが組内での総当たり戦を行い、決勝ラウンドでＡ組とＢ組の同順位同士が戦った。予選ラウンドは 7/7 に４試合、中二日休養、7/10 に４試合、中二日、7/13 に４試合と進み、7/15 に７位決定戦と５位決定戦、7/16 に４位決定戦と決勝戦が行われた。審判は世界各国から２７名が参加し、固定クルーではなく、試合ごとに４クルーが編成された（１名はダブルアサインメント）。日本からは川田氏、阿部仁の２名が参加した。日本協会の国際委員としてオービックのゼネラル・マネージャー渡部滋之氏が大会運営に携わった。

郷にいらば…

パリと聞いたらエッフェル塔、ローマならばコロセウムが真っ先に思い浮かぶ。しかし、クウェートと聞いてもイラクに侵攻されたときのイメージくらいしか湧かない。在クウェート日本大使館から渡部氏経由でいただいたアドバイスでは、クウェートは「お金は出すけれどもあまり何もしない」という国民性だそうだ。いわゆる「ヌケモレ」が多いだろうから柔軟性が大切であると教わった。日本のように前もって緻密なプランニングし、それがそのとおりに実行されるような環境とは違う。これを身をもって体験したのは、現地のエージェントが手配する航空券や宿泊先の手配だった。国際大会が始まる２週間前になってようやく旅程が各審判員に通達されたが、同じ東京から出発する川田さんと私は、クウェートへの到着便は同じなのになぜか出発便が羽田と成田に分かれていた。これなどはまだましな方で、名前の入力ミスや帰国日の間違いなどで予約を取り直すケースも多々あり、各国の審判員からは不安と不満が噴出した。宿泊先の情報は、出発５日前になるまでわからなかった。それでもクウェート空港についたら出口で NFL ジャージを着ているスタッフが出迎えてくれて、そこからホテルに車でエスコートしてくれた。

前もってきちんと決めることを過度に求めずに、アウェーにいるのだからアウェーの流儀についていこうと腹に決めた。その場その場の状況に応じた判断力、行動力が必要となる。これが後に審判仲間の間で合言葉となった”Go With The Flow”の精神である。

クウェート空港のゲートで待機してくれていたのは Randy Moss？ちなみに、
NFL ジャージのレプリカがクウェートでは一枚 300 円ほどで購入できた

アウェー　その１　７月の気温

日中の最高気温は 45℃、最低気温が 35℃。キックオフが 20 時と 23 時に設定されていたが、それでもキックオフ時の気温は 40℃を超えていることが多かった。しかしながら、乾燥しているせいか、汗が気化するときに体の熱を奪ってくれているようで、水分さえ摂ればすこぶる快適に動けることが多かった。一試合だけ砂嵐の中で試合を行う夜があったが、この日は熱気がこもってしまい湿度の高い日本の真夏のような環境できつかった。

アウェー　その２　ラマダン中の開催
ラマダン期間の日中（日が暮れる前）は、たとえ外国人であろうとも、人前で飲食していると、たとえそれがちょっと水を飲む程度のことであったとしても必ずトラブルになる。裏を返せば、公ではないホテル内で食事をする分には問題はなかった。ホテルでは、毎日 8-11 時、16-17 時､20-23 時にレストランが外国人向けにひっそりとオープンし、地元料理と西洋料理のブッフェやデザートバーが毎日用意されており、食事面ではまったく不自由はなかった。ただしアルコールは一切手に入らなかったため、クウェートについて数日してから口にした 0%ビールを初めておいしいと感じた

ラマダン期間は、スーパーや一般の店は普通に営業しているが、レストラン･飲食店は、すべて日中は閉店する。試合のない日の気分転換にモールや商店街に出かけたが、外では結局水分を取れないので、外出は長くても１時間が限度だった。それ以上外を出歩くとのどが渇いて生命の危険にさらされるからだ。45℃の日差しの中を歩き回ることは思ったよりも体にダメージがあり、外出のあとは昼寝をとって、ホテルのジムやサウナで時間を過ごすことが多く、あまり観光らしい観光はしなかった。

アウェー　その３　想定外への対応
直前まで何も決まらなかったのは旅行のアレンジだけではなかった。開幕試合の前の日にアメフト用のスコアボードが韓国から輸入されてセットアップされていたが、ＧＣ・ＰＣの操作は試合当日までテストできなかった。試合当日､キックオフのレディをかけたのに 25 秒計が動かないなぁと思っていたら、案の定ＧＣが回っていないときには 25 秒計が動かないのはプログラムのバグだったことがあとで判明した。

また大会運営側で用意してくれるはずだったボールボーイも開幕試合のキックオフになっても現れなかった。運営サイドに確認したところ、ボールボーイを用意するという認識がなかったそうだ。急遽チームのコーチやスタッフにできる限りのサポートをお願いして試合を乗り切った。

また、試合が終わり会場からホテルまで送迎するバスの運転手が見つからないため、ホテルになかなか戻れなかった。８時にキックオフしたクルーが１０時半ごろにスタジアムからホテルに戻るバスに乗るために駐車場に行くと、たしかにバスは止まっているのだが運転手の姿が見えない。１時間以上待ってようやく運転手が見つかった。どこに行っていたのかと聞くが言葉が通じないので身振り手振りで聞くと、「ラマダンだからお祈りしてた」とかいう答えが返ってきた。「ラマダンだからｘｘｘ」という説明（？）は滞在中何度も聞いた気がする。こういう状況に遭遇すればするほど”Go With The Flow”、アラブ語でいうところ「インシャーラ」（神のみぞ知る）の大切さが身に染みた。

アウェー　その４　IFAF（国際アメリカンフットボール連盟）の文化
アウェーは何もクウェート文化だけにとどまらない。フットボールの国際大会を主催する IFAF（International Federation of American Football：国際アメリカンフットボール連盟）もまた異文化なのだ。IFAF が主催する国際大会に参加する審判の多くはヨーロッパ出身である。IFAF の主要メンバーがヨーロッパ出身であり、日ごろから組織運営にかかわっているのでお互い知り合いであることが多い。その多くはクルーチーフ経験者（あるいはレフリー専任）クラスである。逆に、日本、中南米、オーストラリアから参加する審判員はヨーロッパの審判員からしたら未知数であり、こちらもヨーロッパの審判員の経験がわからない。また、IFAF のメカはアメリカと日本が採用している CFO メカと微妙な差異がある。IFAF が主催する国際大会に参加するのは今回が 2 回目だが、いつも最大のアウェー要因だと感じる。

アウェー　その５　レフリーとしての参加
想定外が多かった今大会の中でも最大のサプライズはレフリーアサインメントだった。当初ＳＪとして本大会に登録されていたのだが、大会３週間前に審判のスーパーバイザーからレフリーが一名欠員したので穴埋めできないかとの打診があり、せっかくの機会なのでありがたく経験させてもらうことにした。その後、前述のトラベル手配のミスに起因してレモニアさん、ベケットさんを含むアメリカ人審判３名が参加しなくなったため、さらにレフリーをさらにもう１人集めることとなった。結局、レフリー陣は IFAF 審判部長でデンマーク人のフランク、ドイツ人のオリバー、オーストリア人のボヤン、そして阿部の 4 名となった。フランクは IFAF でのキャリアも長く、ヨーロッパ審判間での人脈が広い。ドイツ出身のオリバーは(「典型的な」といったら失礼かもしれないが)、ものごとをきっちり決めて進めるタイプの人で、プリゲームの進行にも彼のスタイルが顕著に出ていた。オーストリア出身のボヤンはストイックで事前準備を妥協しないタイプ。彼のプリゲーム MTG はまず、45 度を越す灼熱の白昼に１時間ほど海岸を散歩するという「儀式」から始まった。日中誰一人として外出しないこの時間帯に、好奇心だけでこのツアーだけに参加したボヤンクルー以外の審判員もいた。

ひとことでいうと、クレイジーな人たち

アウェーをホームに　その１

このように国際大会では特に様々な「アウェー要因」が発生するため、日々のリズムを維持してアウェーの中であっても自らをホームに近づけることが重要である。海外で時差をリセットするのに効果的なのは朝のジョギングやジムでのトレーニング。朝といっても 35 度近くあるのだが、どうせ時差ぼけなので朝 4 時半に起きてビーチ沿いを 1 時間ほど走り、その後ホテルのジムの風呂（見たいなプール）を朝風呂代わりに使った。たまたま宿泊先が同じだった日本協会の浅田会長と毎朝ジムで顔をあわせることができたのもまた、ホームを少しだけ感じられて助かった。

日本代表の応援にかけつけた浅田会長を囲んで（川田さん、阿部仁）

アウェーをホームに　その２

ゲームが始まってしまえば経験ある審判員同士のこと、阿吽の呼吸で試合を運び、「ホーム」に近い状態に身をおくことができるだろうと考えた。逆に言えば、お互いをよく知らないクルーメンバー同士が信頼し合うには各試合のプリゲームで何をしたらいいか？今回レフリーとして最も注意したのはこの点である（オーストリアのレフリーが灼熱のビーチ散歩を企画したのも、こういった趣旨があったのではないかと想像している）。大会中、メインのプリゲーム・ミーティングは試合当日の昼間に 2 時間程行い、その夜のキックオフ直前にも会場で 1 時間ほど軽めの打ち合わせを行った。準備に頭を使ったのは前日のプリゲームのほうだった。

7/7 予選ラウンド　第二試合 オーストリア 24 – フランス 7

大会前夜にようやく開催された審判の全体ミーティングで、開幕戦を担当するクルーと初めて会うことができた。翌日の試合開始は夜 8 時なのでプリゲームは、試合当日の昼食をはさんで行うことにした。集まったばかりの 7 人を短期間でまとめるために、リラックスした雰囲気の中でメカの基本についての認識あわせをしながら話し合おうと思った。

プリゲームは場所選びが肝心である。最初から目をつけていたのが、ホテルの地下入り口の横にある、ペルシャ・カーペットが 10 畳ほどに広がっていて枕やクッションがふんだんにあって横になれるリラックス・スペース。プリゲームの会場はここしかない！と思っていた。果たして、”フィールド“と命名されたこの場所は、クルーがリラックスできる場作りに大いに貢献した。自国ではレフリー経験も豊富なメンバーであり、発言ネタはたくさんもっていたので、自分は話すのではなく話のネタを振る進行役を努めた。

サイドゾーンでのメジャーメントをおさらい

Meeting ではキックオフからスクリメージプレー、ゴールライン、パント、FG, メジャーメントなど、段階ごとに各自がどういう動きをするのかを質問して説明してもらった。1 時間ほど話し合ったらだいたいお互いの力量について把握することができた。カーペットを小さいフィールドに見立てて、サイドゾーンでのメジャーメントの動きを口で説明するのではなく、実演でシミュレーションもした。これが効果大で、クルー同士の雰囲気がよくなった。当日の開幕試合では特に難しい状況もメジャーメントもなく、無事に終わったと思う。

7/10 予選ラウンド　第二試合 USA 54 – ドイツ 0

クルーがＢＪをのぞいて全部入れ替わったものの、数日一緒のホテルで生活しているので気心も知れてきた。この日はコールの公平性、一貫性をテーマにＯＨの 3 カテゴリーやＤＰＩの 6 カテゴリーをプリゲームでおさらい

した。前回のプリゲームでは映像を見せてベクトル合わせしようとしたところみんな眠そうだったので、今回はカテゴリーやその例外を実演してもらうことでクルーにディスカッションに参加してもらうことになった。

この試合では、ＯＨでドイツチームの 50 ヤードのロングランが帳消しになったプレーで、チェーンクルーが動いてしまっており、プレビアス・スポットを失ったことがあった。これを救ってくれたのは、スコアボードが最後までプレビアス・スポットを表示し続けてくれたこと。おかげでベンチからの抗議にも的確に対応することができた。しかしながら、こういった小さなミスでベンチとの信頼関係がゆらぎ、試合の最後のほうではドイツの監督の暴言や選手の暴力行為などがあり、決してうまくマネージできた試合ではなかった。

7/13 予選ラウンド　第三試合 カナダ 36 - オーストリア 7

この試合では予選ラウンド第一試合のメンバー5 人が戻ってきたので、メカニックの確認は軽く済ませ、ゲームマネジメントの中でも特に罰則施行を中心にプリゲームを行った。反則のシナリオに基づいて、クルー各自がどういう情報をＲに報告し、共有すべきかを中心に体験ベースで話し合った。非常にまとまりの良いプリゲームだった。

３Ｑ途中まで 14-7 の僅差だった試合だったが、残念ながら 2Q の途中、4th-and-10 のパントプレーでＢチームのオフサイドとＢチームのリターン後のデッドボールのレイトヒットが発生し、この罰則施行に１分以上時間がかかってしまった。オフサイドとレイトヒットが同一チームによる反則であることを認識できずにクリーンハンドに気をとられてしまったのと、施行の際に施行地点の確認を怠ってしまったため、サクシーディング・スポットを 2 回ほど置きなおしたことが要因だった。前者の状況を整理してくれたのは BJ、後者の状況を救ってくれたのはまたしてもプレビアス・スポットを表示し続けていたスコアボードだった。反則チームの確認や施行地点の確認は基本中の基本。これらをおろそかにしてはいけない。後半はクルー全体で気持ちを切り替えて、比較的スムーズな運営ができた。

7/16 決勝戦　USA 40 - カナダ 7

予選ラウンドの３試合ではクルーのパフォーマンスが次第に下降していったと感じていたので、なぜ決勝戦クルーに選ばれたのかは不明だが選ばれた以上は精一杯やることとした。

3 位決定戦･決勝戦の会場である Al Nasser スタジアム。日没でも 45 度

決勝戦クルーはSJとU以外は今大会初めて組むメンバーだった。とはいえ、FJ と BJ は 2009 年の Canton 大会の決勝戦で Deep Official としてコンビを組んだホワンとフランクだったので、頼もしかった。HL は灼熱のビーチウォークのレフリーだったボヤン。LJ のマーティンは初めてだが卓越した審判。恵まれたメンバーだった。大会最終日にもなるとクルーの疲れもピークに達しており、プリゲームは細かいことは言わずに１時間ほどにコンパクトにまとめた。選手が感情的になることは予測できたので、選手との冷静なコミュニケーションとスポーツマンらしからぬ行為には早めのフラッグで対応することを確認した。

夜 11 時のキックオフで始まった試合は、前半にＵＮＳ・ＰＦ系のフラッグが４つも出された。本来は選手に話しかけることでもう少し予防的な officiating ができたのかもしれない。後半は大分選手が落ち着いてきて不要なアクションがめっきり減ったので最低限のマネジメントはできたと思う。

この試合のクルーは「全員がクルーワークに貢献できる」という意識が強かった。たとえば Deep は 3 人ともスナップ/レディのシグナルを毎プレー出してくれていた。ウィングは、罰則施行時のアナウンス時に、次のダウンが何かを手で知らせてくれた。こういった、小さな一つ一つの積み重ねがクルー全体で円滑な officiating を作って行くのだと実感した。
もちろん、自国ではレフリーの経験豊富なメンバーだということもあるだろうが、逆に専任ポジションにおいても普段からこのような心構えをもっているからこそレフリーにもなれるのだろう。たとえクルーメンバーが入れ替わったとしても、こういった密度の高いクルーワークを再現できるのが、レフリーのクルーチーフとしての腕の見せ所なのだろう。

決勝戦クルー

終わってみれば…

決勝戦が終わり、ホテルに戻ったら日付が変わって午前3時。その日の朝5時に空港に向けて出発するメンバーもいたため、あわただしい中でもノンアルコール飲料で乾杯をして大会の無事終了を祝った。翌日の午後、クウェートから成田空港に到着したときに、涼しいどころか肌寒ささえ感じた（実際、その日は日本の夏としては涼しい日だったが）。振り返ってみれば国際大会が始まる前に感じていたさまざまなアウェーもこの2週間の生活の中で体が適応して、クウェート大会運営のアバウトさも、45度という気温も、ラマダンの制限も、新しい審判仲間との交流もいつのまにか「ホーム」になっていたことに気がついた。2 週間続いた国際大会が突然終わり、突然のように元の世界に引き戻されたあともしばらくの間、facebook で「非日常」の世界を追い求めている自分がいた。

最後に：IFAF 国際大会に参加するにあたり、合宿・フィールドクリニック準備をはじめとしたさまざまなプロジェクトを教育担当理事およびインストラクター委員会のみなさまにバックアップいただきありがとうございました。サポートくださった皆様に感謝の意を表します。大会で学んだクルーワークの大切さを関東審判部での活動を通じて共有させていただきます。

Sister Cities International Bowl 参加報告

奥居正道

8月11日（月）から16日（土）まで、オービックシーガルズ（以下オービック）3回目となる海外遠征の帯同審判員として馬島敦氏、田中淳夫氏と共に参加させていただきました。今回の遠征先は、オービックが活動拠点を構える習志野市と姉妹都市関係にあるアメリカ、アラバマ州タスカルーサ市（Tuscaloosa）。習志野市とタスカルーサ市の協力により「Sister Cities International Bowl」開催が決まり、現地のセミプロリーグ Amateur to Professional Developmental Football League（APDFL）の選抜チーム「Blazers」との試合を現地審判員3名、関東審判部3名の混成クルーで務めてきました。

アメリカへの移動日となる8月11日（月曜）、成田空港発のアメリカン航空機でダラス・フォートワース空港へ飛び、3時間のトランジット後に同空港からアラバマ州・バーミングハム空港へ約1時間のフライトで到着。空港からバスで1時間ほど揺られて最終目的地タスカルーサ市のホテルに到着しました。今回の遠征には選手約50名、コーチ・スタッフ約20名が参加。チーム関係者以外では、我々関東審判部員とタッチダウン誌の尾川清氏、毎日新聞の小座野容斉氏がチームと行動を共にしました。タスカルーサ市には、1831 年に設立された全米で最も歴史と伝統のある大学の一つとして知られるアラバマ大学（学生数：約35,000）のキャンパスがあります。

キャンパス内にある Bryant-Denny Stadium。ゲーム当日には大勢のファンが見守る中、スタジアム正面にある Walk of Champions と名付けられたこの道を選手・コーチは歩いてスタジアムへと入っていきます。

同大学のアメリカンフットボールチーム Crimson Tides は、全米大学体育協会（NCAA）の南東地区カンファレンス（SEC）に属し、1925 年を最初に過去 15 回もナショナルチャンピオンの座を射止めたカレッジフットボールの強豪校です。直近では、2007 年からチームを率いる Nick Saban ヘッドコーチが 2009 年、2011 年、そして 2012 年と全米チャンピオンを獲得しており、今季も記者・監督によるランキングで上位に記されるなどその活躍が期待されるチームの一つです。

タスカルーサ市滞在中には、市とアラバマ大学の協力により同大学のフットボール関連施設の見学ツアーが行われました。まず訪れたのは、キャンパス内にあるフットボール専用天然芝スタジアム Bryant-Denny Stadium。その収容人数は、全米最大級の 101,821 人ですが、ホームゲーム開催日にはほぼ満員のファンでスタンドが埋め尽くされるとのこと。スタジアムのスケールだけでも驚きますが、You Tube などでも紹介ビデオが掲載されている体育局の

オービックシーガルズと Blazers の選手交流会。現地では、連日「サザンホスピタリティ」と呼ばれるおもてなしを受けました。

トレーニング施設 Mal M. Moore Athletic Facility では、専属トレーナーによる指導が行われる近代的なウェイト・トレーニングルーム、テーピングやリハビリテーション機器を備えたフィジカル・コンディショニングルーム、チームやポジション別のミーティングルームを見学。さらに、屋外にはカレッジフットボール規格に沿った自然芝のフィールド 3 面と全長 150 ヤードの人工芝フィールド 1 面の屋内練習場など、まさに全米トップクラスの環境とその施設を見学しました。

奨学金などを活用して行われる次代を担う高校生アスリートのリクルーティングに関する説明では、NCAA の定める規定の範疇において秋季シーズンのホームゲームに全米から優秀な高校生アスリートを招き、練習施設見学とともに先述したスタジアムで試合を観戦。練習施設や学内のいたるところに飾られている歴代のアラバマ大出身ＮＦＬ選手の名前や写真、過去の王座歴を示すモニュメントなどについて説明が行われ、アラバマ大学が特別なチームであることを選手や関係者に強調しているとのこと。プロフットボール殿堂入りしたジョー・ネイマスをはじめ同大学を卒業した多くのプロフットボール選手を紹介することで、高校生フットボール選手が憧れとして持つ NFL への道も単純な憧れではなくなり、アラバマ大学に進学すればその先の可能性が開かれていることを説明するとのこと。あらためて、フットボールに関する一連の選手育成やチーム運営のシステムが綿密に行われていることを感じました。

また、今回は特別に非公開で行われるチーム練習を見学できる貴重な機会を得ることもできました。秋季シーズン開幕 2 週間前ということもあり、最初の準備運動の段階から Nick Saban ヘッドコーチが大きな声で選手・コーチを鼓舞し、テンポよく行われるさまざまなポジション別練習やオフェンス・ディフェンスの全体練習を見てまわっていたのが印象的でした。全体練習には SEC に所属する審判員がボランティアで参加し、スクリメージ練習などでオフィシエイティングを実施。反則を確認した際にはビデオに映るように選手のそばにペナルティ・マーカーを投げますが、その場では罰則の施行やアナウンス、反則を犯した選手への説明などは行わず、練習終了後に反則名、発生時刻、プレーヤーの番号等をコーチに渡し、ミーティングなどの機会に活用される情報を提供しているとのことでした。練習の邪魔をすることなく、反則を伝えることができるうまいやり方で、我々がチームの練習に立ち会う際にも使えるやり方だと思いました。

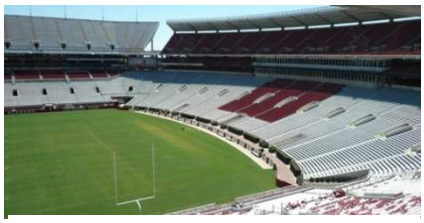
本遠征のメインイベントであるオービック対 Blazers の試合は、現地時間 14 日（木曜）夜に行われました。対戦相手 Blazers は、アメリカ南東部にあるアラバマ州、ジョージア州、フロリダ州、サウスカロライナ州を中心に活動する 35 チームからなるセミプロリーグ APDFL に所属するアラバマ州出身の選手を中心に選抜構成されたチームです。APDFL はセミプロ（教育リーグ）であり、主に 18 歳から 30 歳の選手が所属。奨学金を得られず大学進学を断念した選手や、学業成績が基準に満たないためフットボールプログラムの充実した大学へ進学できなかった選手、そして大学卒業後に NFL やアリーナ・フットボールなどのプロ・リーグへ進めなかった選手など、大学進学やプロ契約へのセカンドチャンスを得るためにスキルやパフォーマンスを磨く場となっています。我々審判員も、

現地審判員との交流や試合運営に関するアドバイスなど、忙しいスケジュールを縫ってかけつけてくれた Billy Beckett 氏を囲んで。

APDFL 所属の審判員 3 名（Gregg Winborne 氏、Jay Neely 氏、Troy Blaser 氏）との混成クルーを結成。渡米前から連絡をとり、双方で採用するルールやメカニックなどの情報を交換するなどして準備を進めました。最初のミーティングには、Georgia 州 Atlanta にある自宅から約 6 時間も一人で車を運転してかけつけてくれた Billy Beckett 氏も同席。Billy が日本の高校・大学・社会人フットボールの運営やその組織だった活動、審判講習会などに Rogers Redding 氏とともに毎年日本を訪れていることなどを説明。ワールドカップでの活躍などで実証されている通り、とても質の高いオフィシエイティングによるハイレベルなフットボールゲームが実施されていると話してくれていました。

APDFL の審判員 3 名はいずれも APDFL の試合や高校生の試合を担当しており、大学レベルの試合経験はないとのこと。Sister Cities International Bowl 運営サイドより、当日は NCAA ルールで行われると通達されていることから、

試合前日までのミーティングでは NFL ルールで実施されている APDFL と NCAA ルールで実施されている社会人フットボールの相違点、メカニックやチーム情報を確認。両チームの選手・コーチにどう伝達するかなどについて打合せ



約10万2千人収容するフットボール専用天然芝スタジアム。

ゲームを担当した APDFL と関東審判部のメンバー（左から、FJ: 奥居正道、LJ: Jay Neely、R: Gregg Wiinborne、U: 馬島敦、SJ: Troy Blaser、HL: 田中淳夫）

を行い、実際に両チームの練習場所に赴いて説明するなどして事前準備・ルール理解の徹底を図りました。

試合当日は朝からホテル内の部屋でプリゲーム・ミーティングを実施。レフリーを務める Gregg を中心に、CFO のビデオなどを用いてルールの確認や、前日に見学した練習の様子などから気付いたことなどを挙げ、様々なシチュエーションで発生しうるプレーを例にあげながらルールやメカニックの確認を行い、クルーの意識統一を図りました。試合会場となったセントラルハイスクールのフットボー

ゲーム当日の予定を変更してスタンドへ駆けつけてくれた Rogers Redding 氏（中央）

ルスタジアムには、多くのフットボールファンをはじめタスカルーサ市・アラバマ大学の関係者が多く訪れました。試合開始前のセレモニーには、タスカルーサ市の市長、千葉から私費で駆け付けた宮本泰助習志野市長、そしてコイントスを行った在アトランタ日本国総領事の深堀主席領事が加わり、とても華やかに行われました。スタンドには、その日の予定を変更して Rogers Redding 氏も駆けつけてくださるなど、大勢の観衆でスタンドは埋め尽くされました。試合結果は既報の通り 16 対 12 で Blazers が勝利。いつもの試合と同様、今後に生かすべき反省点は個々に、そしてクルーとしてもありましたが、ラフプレーなどで試合が荒れることもなく、テンポよくスムーズに運営できたと思います。

一週間弱と短い期間でしたが、このような素晴らしい機会を与えていただいた関係各位に心から感謝いたします。日本のトップクラスのチームに同行できたこと、米国のトップクラスの大学チームでのフットボールプログラムに触れる機会を得たことやセミプロリーグの存在など、フットボールというスポーツの裾野の広さを知る機会となりました。また、現地の審判員やフットボール関係者との交流はユニークかつ大変有意義なものでした。特に、馬島さんや田中さんがBilly やRogers と冗談など言いながら親しく話す様子は現地審判員のGregg やJay からすると信じられない様子で、まるで軍隊の上官とでも話すかのように敬意を表し、とても緊張した面持ちだったのが印象的でした。後日、彼らから送られてきたメールを掲載させていただきます。

Dear friends,

We are thankful for your safe return to Japan. What an experience we shared! Greg, Troy, and I cannot thank you all enough for each of your contributions to our once in a lifetime experience in Tuscaloosa. As we set out on our journey to Alabama on August 12, we speculated and wondered about what adventure might lie ahead of us. What we found was beyond our imagination. Meeting the three of you and Mr. Billy Beckett later that evening set the tone for what I will describe as the beginning of some of my greatest football moments. Your presence immediately set us at ease, as to not only the knowledge and experience of the officials we were to work with, but also as to the character each of you possessed. Atsuo, you truly are a scholar of the game and a gentleman; a quiet leader. Archie, your calming demeanor, knowledge, and confidence are contagious. Masa, the energy you have for the game only are surpassed by your passion and commitment. It is our sincere hope that we have the opportunity to officiate with you again. As we told you during our meetings, you are now our family and we will stay in touch.

Truly yours in FOOTBALL,

Greg, Troy, and Jay

今回の遠征で得た経験を、今後の国内外での試合や審判講習会等を通じて生かすことで、日本のフットボールがますます発展するよう努力し続けたいと思います。皆様、いろいろとありがとうございました。